文化

▼紙相撲のこと

思い出して作ってみた。親指と人差し指の間隔を伸ばしたり縮めたり、あれはこのくらいの大きさだったかと、五㌢ほどの紙相撲になった。適当な菓子箱を土俵にしつらえ、二つを向かい合わせて、割り箸の先で箱の縁をたたくと、あの時のようにトコトコと動き出し、取り組みはじめた。

小沢昭一のエッセイに、少年時代の「相撲メンコ」の話が出てくるが、筆者の場合は、駄菓子屋の店先にぶら下がっていた袋入りの、それである。銭湯の四、五軒先のおばあさんの店で、ねだって祖父に買ってもらった。小沢は、「（駄菓子屋で）一銭出してその袋をどれか引き抜くと、あっ盤石だ、笠置山だ、なんだまた双葉山か、という具合だったのです」と書いている。（『もうひと花』文春文庫）。

昭和四（一九二九）年生まれの小沢の相撲メンコと、わが紙相撲とでは、二十年ほどの開きはあるが、どちらも相撲の力士が当代のスターだったということでは違わない。「当時は、玉錦、武蔵山、男女ノ川（みなのがわ）、双葉山の四横綱時代です」と小沢は言う。こちらは、栃錦・若乃花、いわば栃若時代の全盛期だった。

ところで、小沢が先に名前を挙げている「笠置山」（一九一一～一九七一）が、奈良県の出身だったということをご存じの方は、どれほどおられるだろうか。昭和十八（一九四三）年発行の『奈良県立郡山中学校校友会会誌』の同窓生名簿に、「仲村勘治／東京市本所区東両国　出羽海部屋　笠置山　早大卒（郡山町）」とある。

作家の舟橋聖一は、昭和十六年夏場所七日目、輝国と笠置山の熱戦ぶりを記しており（『相撲記』講談社文芸文庫）、尾崎士郎もまた、「（両国界隈を）笠置山とともに飲み歩いた」と回想している（『相撲を見る目』、創元社）。

紙相撲の力士名の笠置山に、こ

笠置山勝一（『郡山高等学校百年史』から）

なら民俗通信 300 西村 博美

相撲のはなし

疫病退散願う信仰も

としの初場所に優勝した徳勝龍（奈良市出身）も加えて、遊び友達だったMくんを呼んできて賑（にぎ）やかにトントンとやろう。

▼草相撲のこと

さて、折口信夫は、「草相撲の話」という短い文章のなかで、「相撲の古い形は、体に草をつけて行うた」とし、続けて「古代の信仰では、遠くからやって来る異人（ストレンジャー）の姿だつだのである」と述べている（『折口信夫全集』十七巻）。

「くさ」とは、病気と同義であるところから、相撲をするには、体へ草をつけて異人の姿をとることで、病魔退散を願ったのだという。折口らしく、ここでも詳しい説明を省いているが、たしかに「疱瘡」（ほうそう）や「疫瘡」（えきそう）などの語に「瘡」の文字が見える。『続日本紀』にも「天平九［七三七］年、この年春、疫瘡大いに起こる。初め筑紫より来たれり」とある。疫瘡とは、天然痘のことを指す。瘡（ソウ）は草（ソウ）に通じるということか。

折口は、高天原（たかまがはら）を追われたとき、道で青草をつけたとされているスサノオの姿を、相撲の古形に見い出している。神事としての相撲は、神と土地の精霊との争いを表象している。威力のある神が、土地の精霊を打ち負かす。

折口のこの稿で、もう一つ注目されるのは、相撲がもとは、もっと演劇的要素の豊かなものだったとしているところにある。春の初めに遠くの神が来て、その年を祝福して、田の行事をして見せて行く演劇的所作（しょさ）が行われた。相撲はその「復演」であったと、折口は言うのだ。

この日々のコロナ禍の現下である。病魔退散を願う信仰からはじまったという草相撲だが、「満員御礼」はちょっと無理としても、一年六場所大相撲の隆盛をも祈りたい。

▼一人相撲のこと

筆者は、ごく短い期間だったが、瀬戸内海の大崎上島（広島県）に住んだ。ここから近い大三島（愛媛県）の大山祇神社（おおやまつみじんじゃ）には、一人角力（ずもう）が伝わっていて、人間が神と相撲をとって負ける所作を見せる。もちろん、神は人の目に見えないから、土地の精霊に扮（ふん）する人間の「一人相撲」のようにも見える。

最後にもう一つ、我が国最初期の牧師である植村正久の説教を紹介して、この項を閉じることとしよう。

「聖書に見えたる人物のうちにてもユダヤ人の先祖ヤコブの如く解し難き者は少かるべし。……（神は）ヤコブと角力せり。……神はヤコブが何としても拒絶すること能はざる貴客として来りぬ。……然れどもヤコブは如何になせしぞ。彼は我慢の腰を折り、神使の裾を捉えて云へり、汝われを祝するまでは此所を去らしむべからずと。今はヤコブ、神を感じたり、否之を見たり」（『神と角觝（すまひ）へるヤコブ』『植村全集』第一巻、婦人之友社）。植村は、旧約聖書『創世記』三二章の「ペヌエルでの格闘」について説いている。新共同訳の聖書個所は、このようにある。

「（神は）ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、『わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている』と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた」。

「ひとりずもう」のもう一つの語義は、「相手がなかったり、あっても問題にされていなかったりするのに、ひとりで夢中になってその事に取り組むこと。また、その結果何も得ることなく終わること」とされる。しかし、ここで引いたような神と人と相撲をめぐるお話もある。

（にしむら・ひろみ＝詩人、奈良民俗文化研究所研究員）

＝次回は10月2日付＝